

テレビとの付き合い方

1. はじめに

コンピュータを用いることがすでに特別なことでなくなった今、国語科でも当たり前前にコンピュータを用いる授業が行われるようになった。反面、ワープロやメールなどに偏った授業提案が多く、養うべき国語力やコンピュータの利点という点での考察が浅いものが多いように思う。

「読むこと」の授業にコンピュータを用いる提案を続けてきたⁱのは、コンピュータを用いることを目的とするのではなく、コンピュータの持つ潜在能力を生かすことで生徒の国語力を飛躍的に向上させようとする学習活動こそ重要だと考えるからである。

2. ハイパー意味マップを用いた「読むこと」の学習

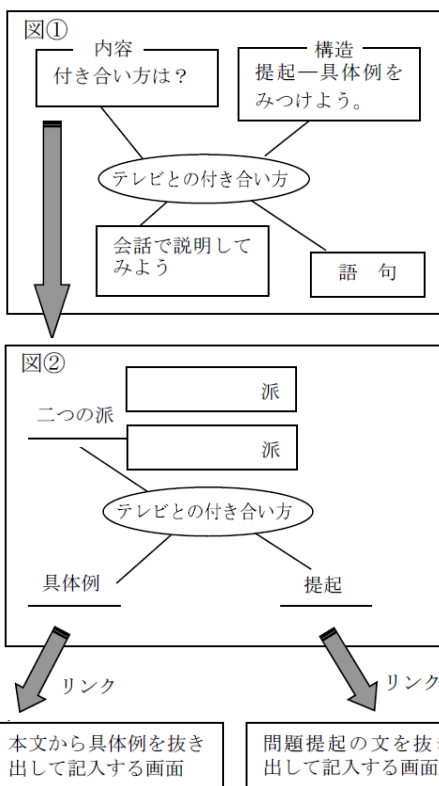
「読む」ということは、情報のレベルでとらえると、線条的な情報であるテキスト(文章)をネットワーク状(記憶)に変換すること(情報の構造変換)であるといえる。従来アプローチが不可能だった読解過程(=線条的テキストからネットワークへの構造変換の過程)にコンピュータの表現力を生かせばアプローチすることができる。

ハイパー意味マップの使い方にはいくつかのパターンがあるが、ここでは、最も基本的な使い方を紹介する。使用するソフトウェアは、ハイパーテキスト、ハイパーリンクが表現できるものであればなんでも良いⁱⁱ。

まず、図①のような第1画面を教師が作っておく。この画面では、この単元で行う学習活動を一覽で

きるよう視覚表現することが大切である。ここでは、内容の読み取り、文章の構造の把握、会話体(具体的なシチュエーション)で事柄を説明するという表現方法の学習、そして語句についての学習の4つを行うということである。図②は、図①の画面からリンクされており、内容(付き合い方は?)をクリックするとこの画面(図②)が表示される。ここでは、内容の読み取りの際に押さえたいことを、生徒の実態に合わせいくつか用意しておく。さらにこの画面(図②)から、二つの派、具体例、提起などの画面を作り、二つの派の違いを考えたり具体例を抜き出したり問題提起の部分を見つけたりする学習画面へとつながっていく。

以上のようにコンピュータ上で学習活動を行うことによって、言語の学習を視覚化することができる。視覚化があらゆる能力開発にとって有効であることについてはあらためて言うまでもない。また、中心のトピックのみを用意した画面に自由に書き込みを行わせる学習の後、生徒の学習履歴を時系列で再生し、読解の過程を分析し、的を絞った学習活動を組んでいくこともできる。



i 「読書科学」日本読書学会 1995 第 39 巻第 4 号 パーソナル・コンピュータを用いた読むことの学習 「月刊国語教育」1997 年 1 月号 コンピュータを用いた読解の学習 他

ii 現在知る限りで最も優れているソフトウェアは株式会社 JR 四国コミュニケーションソフトウェアの「わいわいレコーダー」である